



チェック・ポイント・ソフトウェア・テクノロジーズ
会長兼CEO (最高経営責任者)

ギル・シュエッド氏

チェック・ポイント・ソフトウェア・テクノロジーズは、インターネットと内部ネットワークの境界のセキュリティから、内部・Web・エンドポイントのセキュリティへと製品ラインアップを拡大してきた。その過程は、セキュリティ技術の進歩そのものであると言える。2005年5月に発表した新セキュリティプラットフォーム「NGX」と今後のビジョンについて、同社の会長兼CEO (最高経営責任者)のギル・シュエッド氏と、副会長のジェリー・アンガーマン氏に聞いた。

次に目指すのは 「ユニバーサルアップデートability」の 実現

洗練されたセキュリティほど いかにコストを下げるかが重要

チェック・ポイントといえばファイアウォールの会社というイメージが強かったが、どのような経緯で内部・Web・エンドポイントのセキュリティへと製品ラインアップを拡大していったのか。

シュエッド 1993年に「ステートフルインスペクション」技術を開発し、インターネットのセキュリティ技術に特化した会社としてチェック・ポイントを興した。ネットワークの境界の部分においてファイアウォールを確立したが、さまざまな拠点を結ぶVPN (Virtual Private Network)にもフォーカスしていた。その事業は順調だったが、2003年に自分たちのこれまでの事業を振り返り、検討し直した。境界セキュリティの考え方が正しかったことは、すでに市場で証明されている。そこで、次の10年で何をすべきかについて、徹底的に議論したのだ。

われわれが出した結論は、すべてのレイヤーにフォーカスしたネットワークセキュリティを追求し、内部、Web、そしてエンドポイントにセキュリティ対策を広げていくことだった。この2年間は、そのような戦略に沿って製品を市場に投入してきたが、さらに包括的な製品ということで「NGX」を開発した。

NGXの特徴は統一管理の実現ということだが、多くのベンダーも同じように結合管理を標榜している。彼らとの違いはどこにあるのか。

アンガーマン われわれと同じような統一セキュリティ管理を実現しているベンダーは、ほかにはない。ポリシーを定義してそのポリシーをコントロールしたり、すべてのエンドポイントにまで統合した管理ツールとして提供したりしているのは、われわれだけだ。すべてのセキュリティ製品の相互運用性が確立されているベンダーはいない。

統一管理を実現するうえで、特にどのような点に配慮してNGXを開発したのか。シュエッド NGXの基本コンセプトは、特定の脅威に対処することではなく、企業におけるセキュリティのコストを低下させることだ。企業はよりセキュリティを強化したいと考えているが、それにかかるコストは増える一方だ。したがって、セキュリティが洗練するほど、いかにコストを抑えるかということが重要になる。

また、管理性も非常に重要だ。管理が煩雑だと、当然ミスが犯しやすくなる。そこからセキュリティ問題が起こりかねない。だから、コストを下げるだけではなく、管理のしやすさが非常に重要になる。われわれは、統一されたアーキテクチャでフレキシブルに管理できることを念頭に開発を進めてきた。

各種セキュリティ機器がそれぞれ別々のアーキテクチャで動作していたら、管理者がそれを管理したり操作したりするのに別々のアプローチが必要だが、アーキテクチャが統一されていけば、管理者は1つの操作方法ですべてのセキュリティレイヤーを管理できる。NGXなら、管理者のトレーニングコストも抑えることができるだろう。

ネットワークやアプリケーションの 変化による新しいふるまいを定義

チェック・ポイントの開発ロードマップにおいて、内部・Web・エンドポイントへの製品ラインアップ拡大がフェーズ1、NGXによる統合管理がフェーズ2だということだが、フェーズ3は何なのか。シュエッド フェーズ3は、常にすべてのセキュリティ機器を最新の状態にしておく「ユニバーサルアップデートability」の実現だ。これにより、リアルタイムで動的なアップデートが可能になる。

まずは、セキュリティの脅威に対して、常にすべてのセキュリティ機器を最新の状態にしておくことが重要だ。脅威には既知のものだけでなく、未知のものもある。新しいアプリケーションを追加したときに、今後どんな脅威が出てくるかをあらかじめ予測しておくことは不可能だが、もし何か脅威が発生したら、直ちにそれをブロック

する体制にしておくことが必要だ。そのためには、動的かつリアルタイムのアップデートが不可欠となる。

パッチマネジメントとどう違うのか。

シュエッド われわれは、1999年からパッチマネジメントを実現してきたが、ユニバーサルアップデートabilityはそれとはまったく異なる。単にソフトウェアの定義ファイルを書き換えたり、新しいソフトウェアを追加したりするといったことではなく、もっとインテリジェントだ。

カギとなるのは、われわれのシステムがプログラム可能なテクノロジーによって作られていることだ。

例えば、ステートフルインスペクションは「INSPECT」というスクリプト言語を使っており、ネットワークの「ふるまい」とセキュリティポリシーがデータベースによって関連づけて定義されている。これらを活用することによって、ネットワークのふるまいをセキュリティポリシーと密接に連係させ、動的かつリアルタイムに対処できるようにしようとしている。

例えば、外部からウイルスが入ってきた場合、単にそれをブロックするのではなく、内部で起こるネットワークのふるまいに対して、それが起こったらどうするかという定義を更新するのである。

アプリケーションが追加されたりシステムが変更されたりした際にも、新たなふるまいになる。それは、ネガティブなものだけでなく、当然ポジティブなものもある。



チェック・ポイント・ソフトウェア・テクノロジーズ
副会長

ジェリー・アンガーマン氏

定義されるのは、どのアプリケーションのどの行動にセキュリティを適用しなければいけないかということだ。アプリケーションが何かアクションを起こそうとすると、サーバがそれを認識し、このアプリケーションのこのふるまいはストップさせる、あるいはユーザーに確認する、といったことを定義するわけだ。

アンガーマン すべてのセキュリティ問題にパッチが存在するわけではないので、パッチマネジメントの延長ではセキュリティ問題は完全に解決されない。われわれのソリューションは、パッチの存在しないネットワークのぜい弱性や脅威に対する防御を提供するものであり、この技術はパッチマネジメントを越えたテクノロジーであると言える。

(取材/文 柏木恵子)

Profile

ギル・シュエッド (Gil Shwed)

1993年にステートフルインスペクション技術を開発し、関連する特許を取得。友人2名と共同でチェック・ポイント・ソフトウェア・テクノロジーズを設立。2002年6月、Academy of Achievementの「Golden Plate Award」を受賞。2003年1月、世界経済フォーラムの「Global Leader for Tomorrow」を受賞。2004年6月、テクニオン・イスラエル工科大学の名誉科学博士号を受賞。同社の経営と技術戦略のキーパーソン。

ジェリー・アンガーマン (Jerry Ungerman)

ハイテク分野において、営業、マーケティング、マネジメントで30年以上の実績を持つ。1998年に上級副社長としてチェック・ポイントに入社し、2001年5月に社長に就任。2005年3月より現職。同社と顧客およびパートナーとの橋渡し役として活躍している。